

秋野志保の非日常的な日常2

シャルル@推理小説大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

T大生で起こったある事件（ ）から少しした後のお話。

今回もひよんなことから事件事故に巻きこまれる…のか？

目次

秋野志保の非日常な日常2

秋野志保の非日常な日常2

秋野志保の非日常な日常2 (続編)

プロローグ

「暇だなあ」

また、口にしてしまった。だって暇なんだもん。

いや、そりやまたあんな鬼ごっこされちゃあ困りますよ？あれ夢だったけど。

そう、あれは結局ただの夢。普通にクイズして普通に鬼ごっこしたらしい。しかも景品はペア旅行券。ハルはゲームの存在知らなかったらしい。ふーよかった。

：多分坂田さんも欲しかったんだろうなあ。

あの人なんだかんだでモテるし。

いや、私は1人カッパル予備軍を潰したんだ。はっはっは。

ピロリン☆

あ、ハルからLIME来た。

ピロリン☆ピロリン☆ピロリン☆

うるせえ。なに？新手の嫌がらせかい？

「4人で遊びに行った日さ、学校でゲームあつたつて？」

「なんで教えてくれなかったの？」

「ねえ」

おおやばいこれはピンチ。とりあえず既読無視。てか嫌がらせつてもはや正解じゃん。なんかくれ。旅行券。

ちなみにメール着信音は変えてない。なんか変えたら負けな気がする。

さあて：バイトだ。時計は8時。今日は遅刻してない。

してなかった：けどさ。

この機械いい加減新しいの買おうよ。いやもうホント。バーコード読まないよ？なんで手で打つのめんどくさい。

どうやらハルは電話に切り替えたらしい。さつきから尻ポケットが震えてる。怖いよ。メリーさんかよ。

また1人、客が入ってくる。そろそろ上がる時間なんだけどなあ。
…ハルだった。

一章 その始まり

「ひどいもう最低わけわかんない！」

ハルは怒り心頭。当たり前だ。

とりあえず忘れてたことにしといた。だってあんな夢の話したらバカにされるし。

「まあ仕方ないじゃん。終わったことだし。」

「あんたねえ！私はあなたのためを思ってるのよ！」

なんなのこのセリフ。やっぱハルはオカン粹だな。オカン粹って何？

ハルが怒りの矛を納めるまで、ハルに黙って増援に例の2人を呼んで、来るまで付近の居酒屋で待機。

…増援最強だなおい。

ハルは酔ってるにもかかわらず、一瞬で増援を捕捉。彼らの元へ素早く移動。やっぱ女ってもんは信じられねえな兄ちゃん。って私も女か。

「とりあえず酔い潰そう」

ボソツと男2人が口にした言葉を私は聞き逃さなかった。

「あたしはね、ぐすつ、みん、みんなとねっ、りよこっ、旅行につ、いぎだがつたのお！」

簡単に潰れた（潰された）ハルは、泣きながら私に語りかける。にしても聞き取り辛いな。どこかの県会議員みたいだぞ。

「わかったわかった。んじゃあ今度き、みんなでどっか旅行行く？」
でまかせを言っつて、ハルを引き剥がす。

増援二人に家までハルを送り届けてもらい、私は自らの家へ帰る。

piririri…

お？坂田さんか。ハルについての苦情かな？

—————

TO 秋野志保

FROM 坂田京

とりあえず無事に彼女は家へ送り届けました。
ところで旅行の件ですが、いつにしますか？

……あれを間に受ける奴がいたとはね。
言ってしまったんだからしゃあない。

旅行、行きますか。

…坂田さんのおごりで。

二章 m a u n t a i n o r o c e a n

「絶対山！」

「えー？私海がいいなー」

「二どっちでも構いませんよ？」

こういう時の定番、山か海か討論会だ。

ちなみに私は山押し。ハルが海押し。男性陣は行けたらそれでいいんだって。

なんで山って？そんなの決まってるじゃん。

この時期、いやこの時期しか海空いてないけどさ、海にはリア充が溢れかえってやがる。あいつら前にして平常心保てる自身ないもん。

あと水着。ハルはスタイルいいから気にしなくてもいいかもしれないけどさ、もーちよい他人のこと考えようね？

「やだよ絶対海がいい！冷たくて気持ちいいし山って高山病とかあるじゃん！」

あんたどこの山行く気だよ。さすがに標高2000mとかは行かないよ？

…彼女が嫌がる理由は分かってる。彼女は体力が壊滅的に無いのだ。

そして私は体力なら男子超える。頭もいいし。(自称)おいてかれるのが嫌なんだろう。

「じゃあさ、じゃんけんで決めない？」

…なん、ですと？じゃんけん？じゃんけんってあの石とハサミと紙とかいうよく考えたらシユールな光景のあれですか？

マジか。絶対に海だけは行ってはいけない。海行ったら確実に坂

田さんルートは崩壊する。

「いいもん！絶対勝つから！」

よし言ったな。ああいうのは勝利宣言した方が負けるって相場が決まってるのよ！

「じゃあーんけえーん！」

私は紙。彼女も紙。

「へへへ…なかなかやるわね」

どつかの中ボスみたいな事言ってるぞ。

「ああーいこでえ！」

私は石。彼女は…ハサミ。

「いいよっしやああー！」

やった！坂田さんルートはまだ残ってる！

どつかの梨の妖精並みに飛び跳ねながら、そんな事を考えていたら、坂田さんと目があつた。

坂田さん引いてる。

…あれ？これとづくに坂田さんルート崩壊してない？

まあいいや。リア充は海でキャーキャーやってな。私はそれを遥か上から見下ろしてやるよ。

よーし。山と決まればあとは男性陣に任せよう。面倒だし。

そんなこんなで、登山確定。ちなみに深夜、キレたハルからスタ爆されたのは別のお話。

結局、体力面も考慮して、1000メートル歩かないかくらいの山に決定。

ハルは500でいいとかごねたけどさ、それもう丘だからね？ピクニツクだよ。

ちなみに移動は大村さんの車。いいなあ。私は車欲しいけどお金無い。ハルは多分買えるんだろうけど運転が下手そう。

とにかく、大村さんともLIMEとアドレスを交換して、連絡を待つことに…

待つ必要無かった。

TO 秋野志保、大賀内晴

FROM 坂田京

行き先決まりました。△△山です。○○日でどうでしょう？

簡潔な文だなあ。サラリーマンとか向いてそう。

そして最後に、集合日時が書いてある。

…来週かよ。早すぎんだろ。このメールのスピードといい日付といい、楽しみにしすぎだろ。小学生か。前日は寝れないタイプ？

ま、いいや。そうと決まれば善は急げ。買い出し行ってこよ。

三章 結局

結局そーなのね…

私、秋野志保は困っている。

なぜなら…山にちよつと大きめの川があつたのだ。

でも、その事実が当日行つてから判明すれば、まだ勝ち目はあつた。

「あゝごつめえん私い、水着いるなんて知らなかつた〜」と言えば終わりである。どつかのキャバ嬢みたいだなこれ。

でも、

TO 大村亮介、坂田京、秋野志保

FROM 大賀内晴

ねえ！△△山って途中に水遊び可能な川あるんだって！だから水着必須ね！特に志保！あなたの考えはわかつてんのよ！

はい詰み。投了。

しかもこいつ、私の宛先が一番最後かよ。女の友情って儂いねえ。てか一斉メールで私に向けて書くな。

そんな事考えてる私の聡明な頭に、電球が光った。

よっしゃ！まだ詰んでない！ふっふっふ…

私の逆転の妙手をみせてやんよ！

登山当日

みんなが決めた駅に集まり、△△山登山開始。

逆転の妙手を持っている私は余裕の表情。

山登りでバテたハルは必死な表情。

ほんと体力ないね。

「大丈夫？・晴」

大村さんがおんぶしてあげる。爆発しろ。

てかその手があったか。私も坂田さんに…って坂田さんも結構辛

そう。あんた男だろ。

まあカップラーメンばかりの彼に登山は辛いのかも。だらしないね。

なんだかんだで例の川に到着。

さあ！私の逆転の妙手をみせてやる！

私の出した答え。それは…

水着☆オン☆パーカー。

どうよこの作戦は！ボディラインを隠すと同時に水着を着るというミツシヨンも達成！

ハルほんとスタイルいいよね。分ける。

ハルは大村さんと水遊び。

私は坂田さんと貸し竿で釣り。もちろん同じ川じゃないよ？怪我するし。私達は釣り堀。

ご飯の調達だあー。

にしても…凄い釣れる。どーしようこれ。4人分どころじゃないよ？

とりあえず袋に入れて、お持ち帰り。あとでスタッフが美味しくいただけますよ。

いま財政難だし、ちょうどいいや。

引き続き、登山。頂上まで、あと半分くらいかな？

四章 急展開

…寒い。

そんなわけ無いと思う？今は8月。しかも海でわーきゃー言ってるリア充どもよりお日さまに近いのだもん。そう思うかもね。

確かに、少して頂上…なのだ。

頂上：…なんだけどぎ。

雨降ってんのよね。いやもう豪雨級。家いたら学校休みだーって小中学生が踊り狂うレベル。残念ながら私にやバイトがあるんだよ。てかこれ大丈夫？とりあえず岩穴潜り込んだけどぎ。

ところでなんで映画や小説ってうまい具合に洞窟とか逃げ道あるんだらうね。

いやいや…これは現実。逃げるな私。

「まずいですね…携帯は圏外、下山はおそらく不可能でしょう。」

木に座って坂田さんが言う。まあそうだらうね。

「え？…なんで？降りるだけでも降りてみようよ！ほら、登る時こんな穴いっぱいあったし！」

はっはっは。ハルはわかかってないね。なんで下山が無理かっていうと…「あのですね、晴さん、確かに途中までは帰れるでしょう。ですが、あの川は確実に氾濫、さらにこの雨では1メートル先を見るのがやっと。岩穴が見つけれられるかはわかりません。」

おいこのやろう。人のセリフ横取りすんなよ。

「秋野さん？」

お、大村さんしやべった。

「何？」

「魚…」

魚って何だよ。私は哺乳類だぞ。アイアムアヒューマン。

「魚釣りの魚焼きませんか？」

大村さんはいいながらマッチを取り出す。なんでそんなもんあるんだよ。放火でもするのか？

「僕喫煙者なんで」

おお。そういえば私達が19だから2人は20なんだね。え？なんで19で酒飲んでるか？たまにだから許して☆

はいすみません。未成年飲酒ダメ絶対。

ともかく、魚食おう。

そこらの木を集め、私の魚を焼く。

ああ、私の明日のご飯が…って言ってる場合じゃないね。

湿ってるから火がつかない。雨降ってるからね。あ、でも生はやだよ。寄生虫いるかも。

にしてもこれホントおいしい。自分で釣ったからかな？

「うちそうさまでした」

みんなで声揃えて言う。なんか打ち上げ見たい。山の洞穴の中だけど。

「寒い…」

晴が声を上げる。寒いですねえ。

「あ、僕のどうぞぞ」

大村さん、自分の上着をハルに。ベタなドラマか。羨ましいぞ。

「うう…寒いよね」

私も言ってみる。坂田さんチラ見しながら。

坂田さんはなんかブツブツ言ってる。脱出方法かな？てか上着ちようだいよ。

仕方ないから例のパーカーを取り出し、装備。

しほはぼうぎよが1上がった！さむさにすこしつよくなった！

…でも寒い。心が。

五章 奇跡的な生還

「…今の状況を整理して考えたんですが」

坂田さんが口を開く。

「僕の座ってる木、動かせるんです」

つまり？

「これでソリとか作って降りる！って言うのは…」

「無理でしょ」

あ、声出ちゃった。

「外は雨降ってるんだよ？」

「いえ、でもかなり弱まってきましたし…」

「弱まってても下はぬかるんです。舵効かないよ。それに、この山、登山道以外は木々が生えまくってる。絶対事故るよ」

「あとさ、それ結構大きいのにさ、そんな簡単に動くってことは結構脆いよ？外の木は結構固いよ？たぶん」

「そうですか…」

なんか否定ばっかでごめん。

ふう…また寒くなってきたし。

…あれ？寝てた？てか冷たっ！足冷えるっ！

「…水？」

水だ。てか雨だ。入ってきたんだ。

「あ、起きた？」

晴が肩を叩く。

「なんかね、角度的にこつちに外の雨がちよつとずつ流れてくるみたい」

「でさ、隣にもう一つの洞穴があるんだけどさ…」

…まじかあー。

「別によくはない？これ以上の雨当たったら体温奪われるんだけど」
てか動きたくない。ものぐさ志保です。

「そっかあー…それもそうだね。」

よしok。残ろう。

うー…暇だ。

呑気だつて？暇なもんはしゃあないじゃん。

ああー暇だ暇…

突如、地が揺れた。地震？そんなんじゃない。

これはまさか…ひよつとすると…

「地滑りですー！」

ですよねえ！

しかもこれ、私達の岩穴も一緒に落ちてない？ねえ！

不意に、岩穴の入り口が緑に染まった。

ていうか樹木だ。私の方に突っ込んでくる。

「志保っ！」

坂田さんの声と同時に、強い力で横に弾き飛ばされ、私は気を失った。

「…ほー志保っ！」

誰か呼んでる？ありやー閻魔様かな？私はまともな人生送ってきた。

ましたよ？天国確定。

「志保っ！」

水が掛かる。

あれ？水？慌てて跳ね起きる

…跳ね起きる？

「よかったああああ！」

ハルが私に抱きつく…つてもはや体当たりじゃん。

はるのたいあたり！しほはたおれた！

「生きてたあーよかったああ！」

よかったよー…

ハルが泣いている。そーいや地滑りしたんだっけ？

そうか。そのまま下まで降りてきたんだ。

向こうに救急車みえる。でもみんな怪我してなさそうだね。お勤

めご苦労様です。

「…って坂田さんは!？」

そうだ、坂田さん！

あの時私を突き飛ばして…そのあと？

慌てて辺りを見回す。どこにも見当たらない。

最悪の想像が脳に現れる。

嘘、夢であつてくれ。あの時の大学みたいに！

「あ、起きたんですね」

探した声が聞こえる。

トイレの方から坂田さんが歩いてくる。

「あー？志保泣いてるー」

ハルがからかう。

あたりまえだろ。てかあんただって泣いてたじゃん。

「んと…僕は秋野さん突き飛ばして、代わりに木にぶつかったんですよ」

何故無傷？てつのよろい装備してたとか？

「でもほら木って、葉っぱの生い茂つてるところはフカフカじゃないですか」

あー。なるほどね。

「そこがクツションになって、押し潰されずに済んだんだ」
「そうゆう事です」

よかった…ほんとよかった…

そうつぶやきながら、私はまた眠りに落ちた。

後日

「いやーもうほんと生きて帰って来れてよかった！」

私はテンションMAX。

私たちが今どこかというところ…例の居酒屋。

あ、君たちは未成年飲酒しちゃダメだぞ？

「ほんとー！一時はどうなるかとー！」

ハルも高テンション。

「木が突っ込んで来た時はほんと怖かったです」

「でもいい経験になったんじゃないですか？」

男2人はいつも通り。でも顔赤いし酔ってないわけではなさそう。

「あ、僕そろそろ終電来るんで帰ります」

坂田さんが時計見て言う。

「あーじゃあ私も！」

「またね！」

二人で帰途に。

「うう…夜の繁華街って寒い…」

なんとなく呟いたら、上着が被さってきた。

「…どうぞ」

坂田さん顔真っ赤。かわいい。

「ありがとう」

でもたぶん私も人の事言ってもらえない。

「…あの日のMVPはやはり秋野さんですね」

「ほえ？なんで？」

「途中で、洞穴を移ろうという話になった時、そのままがいいって言ったじゃないですか」

「あー、言ったかな？」

「言いました」

「実はもしあの隣の洞穴に移動してたら、どうなったと思います?」

あー…そういう事ね

「取り残されてたんでしょ?でもそんなのたまたま…」

「違います」

「…崩れたんです。地滑りの拍子に」

おお… マジか…

「だから…秋野さんには感謝してます」

ほお…ならばこれを利用しない手は無い。

「じゃあさ…お願い聞いてくれる?」

「なるべく安いのでお願いしますよ」

私のお願い⇨物買えじゃないんだよ。

うーん。口に出すの照れ臭いな。ま、いいや。

「私の事、名前で呼んで?あの時みたいに」

あの時は、名前で呼んでくれた。

もう一度だけでいい。落ち着いて聴きたい。

「…志保」

エピソード

…私は一体考えてんだ。

ハルに勧められた携帯小説作り。

坂田さんからメールが来たのをネタにこんなものを作ってしまった。

うわあ…これは私の黒歴史だな…

制作時間はおよそ2時間。私ってやっぱり天才だったのか?
ってメール返さないよ。

TO 坂田 京

FROM 秋野 志保

いいけど…絶対山ね。

…私ってバカなのかな?

まあいいや。あれは私の小説の中の出来事。ほんとにあるわけじゃない。

でも…

名前で呼ばれてみたい。

僅かな可能性に賭けてでも。

ふーつと深呼吸。

「えいつ」

「メールを送信しました」の文字が出るまで、やけに長く感じた。

…さて、パーカー買いに行くか。

END